



## 音楽で紡ぐ台湾と日本の縁

シンガーソングライター 馬場 克樹

あなたは何になりたかったのか？：

「二十歳の頃のあなたは何になりたかったのですか。」

「それでは、六十歳になった時、あなたは何をしていたいのですか。」

2007年5月に交流協会台北事務所の文化室長として赴任した私が、台北で暮らし始めてから一年が過ぎた頃だったと記憶している。ある日、オーストラリアのシドニー在住の友人であり、私の兄貴分でもある作家の永淵閑さんが、自身のブログの中でこのように問いかけていた。閑さんのこの言葉は、ブログという性格上、不特定多数の読者に向けられたものであったはずなのだが、私にはそれが直接自分に向けられた問いかけのように感じられ、胸の奥深くまで突き刺さったのだった。

実は二十歳の頃の私は、大学のサークルで音楽バンドを組み、シンガーソングライターとしてデビューすることを夢見ていた。しかしながら、現実の私はと言えば、当時その登竜門であった全国規模の創作音楽コンテストに毎年応募しては、地方予選に辿り着く前にことごとく落選していた。やがて自分の才能に見切りをつけた私は、大学卒業と同時に就職をし、それから十数年間、音楽創作とは全く無縁の生活をする事となった。しかし、二十歳の頃の自分は、確かに歌手として華やかな舞台に立ちたいと願っていた。

それでは、六十歳になった自分は何をしていいのだろうか。私は自問してみた。すると、小学校や養老院でギターの弾き語りをしている自分の

姿と楽しそうに自分の歌に耳を傾け、それを一緒に口ずさんでくれている子どもや老人たちの笑顔がふと脳裏に浮かんだのだった。それは柔らかな日だまりに包まれているような光景だった。

この瞬間、はたと気づいた。二十歳の頃の夢と六十歳になった時の夢は、一見性質が違っているようにも見えるが、大きな共通点もある。過去の自分も未来の自分も歌を歌っていたいと言っているのではないか。ならば、今この瞬間の自分も歌を歌えばいいではないか。そう決意してから間もなくすると、不思議なことに台湾の若いミュージシャンたちが、次から次へと私の目の前に現れた。その一年後には、「爸爸辦桌（注：台湾語でバババンドォと発音し、パパの宴会の意。英語のバンド名 Baba Band との掛詞。現在は活動休止中）」という四人編成のバンドを結成し、台北市内の「河岸留言（Riverside Music Café）」というライブハウスに定期的に出演するようになっていた。

読者の皆様に誤解の無いようお断りしておきたい。当時の私の音楽活動は、基本的に退勤後の夜九時以降からで、交流協会の職員という仕事柄、ライブ出演はノーギャラであった。また、「尾牙（ウエイヤー）」と呼ばれる忘年会の席で、私のバンドの演奏を聴いてくださった齋藤代表（当時）からも、「馬場君は職業を間違えたのではないか。これからも日台の音楽交流に励むように。」とのお墨付きをいただいた上でのことであった。

このバンドは、結成一年後の2010年には、台湾先住民アミ族のシンガーソングライターの舒米恩（suming）君と一緒に、台中や高雄への島内巡回ツアーを組んだり、沖縄国際アジア音楽祭やTEDxTaipei いった国際イベントにも出演したり



©Photo By Tony Lee

するようになった。なお、舒米恩 (suming) 君は、今では台湾最大の音楽賞である「金曲賞」の常連であり、2012年には「最優秀原住民歌手賞」も受賞している。

まさにこれからが期待された矢先であったが、私は三年半に及んだ交流協会台北事務所での任務を終え、2010年9月に台湾を離れることとなった。それでも私は「爸爸辦桌 (Baba Band)」のライブ出演のためだけに、自腹を切ってその後もほぼ二ヶ月に1回のペースで二年間台湾に通い続けた。そして、2012年8月末に、私は音楽家として身を立てる決心をし、再び台北に舞い戻ったのだった。五十歳を目前にした私が、どうしてそのような決断をするに至ったのか。その問いにお答えさせていただく前に、いったん時計を私の幼少期まで大きく巻き戻し、そもそも私と音楽が関わることとなったきっかけから話してみようと思う。

#### 父の薫陶を受けた幼少期：

1963年に宮城県の仙台で生を受けた私は、生後一年経った翌年からほぼ十年間、父の仕事の都合により静岡県の浜松というところで過ごした。幼

少期の記憶は、虫採り、魚釣り、草野球、ほぼそれだけと言っていいほどのまったくの自然児だった。こっそり白状すると、小学校一年生から二年生にかけての一年半ほどだけオルガンを習ったことがある。しかしながら、当時の私は「昆虫博士」のあだ名をいただくほどの無類の虫好きで、暇さえあれば田んぼや野山や鎮守の森で昆虫採集に明け暮れ、オルガンのレッスンにはまるで関心が無かった。今から思えば先生には大変申し訳なかったが、たびたびレッスンからも逃亡し、結局『バイエルン』という教則本のバッハの「メヌエット」という曲を習い終えたところでオルガンは放棄した。正式に音楽を習ったのは、学校の授業を除けばそれだけで、今では鍵盤楽器はほとんど弾けず、楽譜も一見しただけでは読めない。

さて、幼少期にはもう一つ鮮明な記憶がある。それは音楽好きだった父が、家でよく洋楽のレコードを聴いていたことである。父のコレクションだった1950年代～1970年代のスタンダードナンバーや洋画の主題歌の薫陶を受けたためか、現在でも私の最も敬愛する歌手はナット・キング・コールであり、アンディ・ウィリアムスである。「Mona Lisa」や「Moon River」といったナットや

アンディの代表作は、今でも折に触れて聴いているし、自分でもステージで歌っている。また、自分の楽曲においてメロディラインを特に重視するのは、こうした幼少期の原体験が深く関わっているのだろうとも感じている。

また、父はテレビの歌謡番組も好きで、とりわけ「懐かしのメロディ」は欠かさず観ていた。戦前の楽曲である「東京ラブソディ」や「蘇州夜曲」、戦後直後に流行した「リンゴの唄」や「青い山脈」なども、傍で聴いていた私は諳んじることができる。振り返ってみれば、オルガンからは逃亡した私だったが、歌うことだけは父譲りでずっと好きだった。当時流行のアニメソングはもちろん、自分が通っていた幼稚園の園歌から、小、中、高校、大学の校歌さえも、全てこの歳になっても覚えている。

ただ音楽好きの父と一緒にいて、当時どうしても馴染めなかったことが一つだけある。父と一緒に風呂に入ると、父は決まって謡曲を唸り出し、それを私にも教え込もうとした。幼少期の私は生理的にそれを受け付けず、父が「高砂の〜」と唸り始めると、一刻も風呂から上がりたい気分になった。とは言え、日々音楽に包まれていたのは、今から思うと大変幸せなことであり、音楽との接点を絶えず提供し続けてくれた父には大いに感謝している。これが今の私の原点となっている。

### シンガーソングライターに憧れて：

中学校に入ると、サイモンとガーファンクルやカーペンターズに魅せられた。ただ、不思議と当時の同級生たちが夢中となっていたビートルズやローリングストーンズにはほとんど関心が無かった。高校時代になると、日本のフォークやロックも聴き始め、シンガーソングライターの松山千春や浜田省吾に憧れた。最初に作詞作曲をしたのは、高校三年生の十七歳の頃だったと記憶しているが、いつしか自分もシンガーソングライターを夢見るようになっていた。大学に入学して一年

経ってから、フォークソング研究会というサークルに入部し、初めて自分のギターも手にした。バンドも組み、自作曲をコンテストに応募したが、ことごとく落選したことは既に述べた。サークルの部長でありながらも、サークルの定期演奏会の舞台にすら一度も立つことができなかった。

ただ、この時代に一度だけ認められたことがある。国費の交換留学生として二年間を過ごした上海で、私は「外国人中国語歌唱コンテスト」という全国ネットのテレビ番組に出演し、二等賞に当たる「金竹賞」を受賞した。当時、台湾ではまだ戒厳令が敷かれ「反攻大陸」と唱えていた時代であり、中国では台湾出身の歌手の歌曲は、表向きは一切視聴が禁止されていた。それでも私はテレビ局を説き伏せ、テレサ・テンの「そよ風（原題：軽風）」という歌を歌った。したがって、中国の公共放送で台湾の流行歌手の楽曲を歌った第一号が私だったことはほぼ間違いない。

テレビの影響は絶大だった。番組放送後には、大量のファンレターが大学の宿舎に届き、上海はもちろん、旅先の南京や昆明の街角を歩いても見知らぬ人から声を掛けられた。ちょっとした著名人の気分も味わった。しかし、それだけだった。留学から帰国した私は、前述のとおり、自分の才能に見切りをつけ、卒業と同時に就職をした。今から思えば、歌詞も楽曲もまだまだ未熟だった。ただ、この時代に創った作品で今でもずっと大切にしている歌が一つだけある。留学時代の仲間たちにも愛された『上海オンマイマインド』という曲で、こんなフレーズが出てくる。

あなたは何を求めてこの街に流れてきたの？

あなたは今でもずっと綺麗な夢を見てるの？

プラタナスが一葉落ちる 冷たい雨に打たれて

音楽創作における挫折から、その頃ずっと抱いていたシンガーソングライターになりたいという

私の夢は、自身の胸の奥深くに封印されることとなった。

モンゴルの大地が教えてくれた：

時間は十数年ほど後に飛ぶ。2002年の8月のことである。私は当時小学校六年と四年の二人の息子たちとともに、モンゴルの大草原に向かった。二人とも地元の少年サッカークラブに所属し、私はそのクラブのコーチだった。モンゴルの大草原に行き、ラインの引いていない無限のフィールドでサッカーをしようという父親の誘いに、サッカー少年だった息子たちは飛びついた。

旅の初日と最後の晩は首都のウランバートルに宿を取り、中間の三泊四日は、ブルドという草原の村からチンギス・ハーンが首都としたカラコルムまでの約百キロを、ひたすら馬に乗って駆け抜けるというツアーに私たちは参加した。大草原でのサッカーもこの旅の醍醐味の一つだったが、人工の灯りが一切無い草原の夜に、満天の星がひしめき合っていた光景は今も忘れられない。この宇宙に比べれば自分の存在は余りにもちっぽけだ。それでも自分もまたこの宇宙の一部である。そんなことに気付かせてもらえた。ただ心が震えた。悲しい訳でも嬉しい訳でもないのに、星を見ているだけで自然と涙が溢れた。

その翌日から草原の乗馬ツアーが始まった。こ

の日は私の人生の転換点の一つとなった。乗馬のガイド役のエンへさんが、彼の甥っ子で当時十四歳の少年だったガンガ君を連れて来ていた。この土地で生まれ育ったガンガ君が颯爽と馬に跨がる姿は、まさに板に付いて格好良かった。ガンガ君と私の二人の息子たちは直ぐに意気投合した。ツアー中に暇さえあれば、三人の少年たちは無限のフィールドでサッカーボールをどこまでも追いかけていた。

エンへさんとガンガ君の的確な指南で、私も息子たちも程なく馬とのコミュニケーションが取れるようになってきた。いつしか馬も徐々にその歩みを早め、早足から駆け足となっていく。やがて人馬が一体となり、自分が風になったと感じた瞬間、それは大地の底から沸き上がるようにやって来た。モンゴルの大草原で愛馬が刻む駆け足のリズムとともに、忽然と私の脳裏に「Wonder land, wonder land・・・」というフレーズと生命力溢れるメロディが繰り返し響き始めたのだった。

後に「ガンガの大地」と名付けられたこの作品は、ほぼ十五年振りの私の創作曲となった。それまでの私は、感性というものは年齢を経るにしたがい枯渇していくものだと思い込んでいた。しかし、それは違った。あの時代、部屋の片隅にずっと置かれていた自分のギターのように、長い間ホコリをかぶり、ちょっとだけ錆び付いていただけ



だったのだ。そのホコリはモンゴルの風がさらってくれた。感性は枯れない。モンゴルの大地が教えてくれた。そして、私は再び歌を書けるようになった。

シドニーでアーティストと呼ばれる：

モンゴルを訪れた翌年の2003年4月から三年間、私はオーストラリアのシドニーに赴任した。シドニーは青空の似合う街で乾いた海風が心地良い。オーストラリア英語でブッシュと呼ばれる森も、シドニー湾に連なる入り江も自宅の直ぐ傍にあって、この街で二人の息子たちは多感な思春期を過ごした。

自宅のバックヤードにはクッカバラ（ワライカワセミ）やフクロウが訪れ、屋根裏では小型有袋類のポッサムがドタバタと毎晩大宴会を開いていた。週末や休暇にはシドニー郊外のピット・ウォーターと呼ばれる内湾によく出掛け、小型のボートを自分で操縦しては、息子たちや友人たちと船釣りを楽しんだ。地上では、この大陸の生物たちは、コアラやカンガルーに代表されるように、有袋類という形で独特の進化を遂げてきた。しかし、海に出れば、アジ、サバ、マダイ、クロダイ、カマス、サヨリ、キス、マゴチ、ヒラマサ、シマアジ、マトウダイ、ハウボウ、カサゴ、カワハギ、マイカ、マダコなど日本でも馴染みの魚介が手軽に釣れた。数千キロを隔ててはいても、海は繋がっているということを実感した。

シドニーで釣りにすっかりハマった次男は、毎日下校するや否や釣り竿を手にして近所のバルモラル・ビーチまで出掛け、釣り仲間の大人たちに餌のお裾分けをいただきながら釣りに勤しんでいた。彼が釣り上げた魚は稀に夕食の献立に加わることもあったが、たいていはビーチのフィッシュ・アンド・チップスの店に持ち込まれては、彼の小遣いとなって消えたいらしい。

さて、シドニーでお世話になった最初の上司が

帰国することとなり、その歓送パーティーの席上で、私は上海留学時代に書いた自作曲をギターの弾き語りで披露した。すると、そのパーティーに出席していたシドニー在住の一人の日本人写真家が、私にカメラを向けてバシバシと写真を撮り始めた。演奏が終わると同時に、彼女は私の傍につかつかとやって来て、さらっとこう言ったのだった。

「なあんだ。馬場さんってアーティストだったんだ。」

初めて他人からアーティストと呼ばれた瞬間だった。自分がアーティスト？少々小傍痒い気持ちではあったが、悪い気はしなかった。その写真家の金森マユさんとはそのことがきっかけで意気投合し、その後マユさんとのご縁で、シドニー在住の箏曲家、小田村さつきさんやメルボルン在住のピアニストでバイオリニストのトム・フィッツジェラルドさん、舞踏家のうみうまれゆみさんといった方々とも親しくなった。私は彼女たちからすっかりアーティスト仲間として受け入れられ、2005年にインドネシアのアチュで発生した大震災の義援金募集コンサートが開催された時には、私もシドニー在住のアーティストの一人として、出演者のリストに名前を連ねることとなった。

そして、2006年にシドニーから離任することになった際には、マユさんやトムさん、さつきさんにも協力してもらって自主制作した初のミニアルバム『From the Red Earth』の発表会を兼ねて、自分の歓送パーティーをライブコンサートに仕立ててしまった。シドニー時代もちろん創作は続けていた。オーストラリアの公園でよく見られるモートン・ベイ・フィグ・トゥリーの大樹をイメージしながら、息子たちの成長を願ってこんな歌も作った。

大きな樹になりたい

大きな樹になりたい  
真夏の陽射しに木陰をつくり  
足下で寝そべるあなたたちを  
そっと見つめる大きな樹になりたい

大きな樹になりたい  
そば降る雨の夜も木枯らしの朝も  
あなたたちが凍えないようにこの手を広げ  
凜と聳える大きな樹になりたい

あなたたちの瞳の輝く瞬間や  
やがて訪れる青春の苦悩や  
悲しみも歓びも別れも出会いも

そのひとつひとつに寄り添いながら

そしていつか春が訪れたならば  
枝一面に薄紅色の花をまとい  
あなたたちの約束された未来を  
笑顔で祝福する大きな樹になりたい

(© Masaki Baba)

シドニーでは、もう一つ別のグループの友人たちとも親交を温めた。私自身の言葉に対する感性はここで磨かれたと言っても良い。冒頭で触れた二つの質問をブログで投げかけた作家の永淵閑さんが実質的な主宰者で、後に作詞家として私の創作の一部にも関わることとなったEさんも参加していた「どんた句」という句会のグループである。たまたま共通の友人の自宅パーティーで知り



合った閑さんに、私は引っ張り込まれたのだった。

「どんた句」というグループの名前は、閑さんが九州出身であったこと、そして私たちの例会がシドニーの日本料理店の「どんたく」という名前の店で開かれていたことに由来する。私たちの例会は句会と称しながらも、実態はほぼ飲み会であった。お互いの近況報告をし合い、宴もたけなわという頃合いで何となく句会に移行する。形式的には俳句もあれば短歌もあれば自由詩もあり、私は自分の歌の歌詞を投稿することもあった。投稿は事前にインターネット上で行ない、閑さんの「三無主義」＝「無比較、無批判、無否定」の精神によって、おのおのが「選句」した自作以外の俳句や短歌や詩の良いところだけを論評するのが決まりだった。

この会では、「吟行」と称して、折に触れてワインの産地のハンターバレーをメンバーで旅したり、閑さんの自宅で料理を持ち寄り、バーベキューパーティーなども開いたりした。とにかくこのメンバーと過ごす時間は楽しかった。何の縛りも無く、純粹に言葉と向き合える喜びを存分に感じ取ることができた。メンバーのそれぞれの感性からも大いに刺激を受け、「どんた句」を通じて、その後の私の創作に対する原動力が培われたと言っても過言ではない。句会としての活動は既に休止して久しく、お互いに滅多に会えなくなってしまうが、「どんた句」のメンバーとの交流は今もなお綿々と続いている。

### そして約束の地、台湾へ：

冒頭に述べたように、私は2007年5月に台湾に赴任した。そして、2010年9月にいったんこの地を離れるまでのほぼ三年半の間に、私は台湾で三十五曲ほどの楽曲を創作した。ほぼ一ヶ月に一曲のペースで創っていた計算になる。ご存知のように昼間は交流協会台北事務所の文化室長としての任務があり、日々の残業も決して少なくはない。

さらに文化室関係の行事は国際会議、展覧会の開幕式、舞台公演など週末に集中するため、ほぼ毎週のように休日出勤もしていた。今振り返ると、いったいいつ音楽の創作をしていたのかと思うのだが、台湾という土地のバラエティに富んだ自然の美しさやこの土地に住む人々の温かさは、不断に私にインスピレーションを与えてくれた。台湾でも多くの仲間たちと出会った。彼らとの縁があったからこそ、現在私がここにいられると言っても過言ではない。ただ、台湾の仲間の話をする前に、シドニーの「どんた句」のメンバーで、私の創作上のパートナーだったEさんについてここで触れておかなければなるまい。

それは台湾に赴任して十ヶ月後の2008年の2月のことだった。一通の電子メールがEさんから届いた。彼女の詠む短歌は実に秀逸で、私はかねてから一目を置いていた。そのメールには、「タンポポの小さな祈り」という詞に添えられて、こんなことが書かれていた。

「今回歌詞を書いてみたのですが、もし気に入っていただければ幸いです。曲を付けていただけないかなと思い、失礼も顧みずお便りしました。」

私はその詞をじっくり読んでみた。子どもの頃にタンポポの綿毛をふっと吹いて遊んだ記憶が鮮やかに甦った。その綿毛は風に乗って大空をどこまでも飛んで行く。やがて新しい場所に根を下ろした綿毛たちは、次の春の訪れとともに、一面の黄色いタンポポの花を咲かせている。そんな光景が脳裏に浮かんだ。その瞬間、モンゴルの馬上での出来事と同じように、メロディがストーンと落ちてきて、私は一気にこの曲を書き上げた。それは曲を書いているというよりも、私というメディアを通じて、勝手に曲が生まれ出てくるという感覚に近かった。

翌日、Eさんには曲が出来上がったことをメー

ルの返信で伝え、続いてギターの弾き語りで簡単なデモ音源を録音して彼女に送った。ほどなく彼女からは驚嘆とともに、「旅に出した子どもが、期待をはるかに超えて立派に育って戻って来た」という表現で、私の作曲した作品に対する最大級の賛辞が寄せられた。それから彼女とは立て続けに5曲ほどを共同創作した。

ところが、その夏にEさんは病に襲われることになる。当初彼女は食餌療法で治療を試みたが、最終的に手術の道を選んだ。この間、私は朝晩彼女にメールでエールを送り続けた。と言っても、彼女が書いてくる治療方針や日常の出来事に対して、ひたすら寄り添うことしか私にはできなかったのだが。私は彼女と共同創作した5曲をミニアルバムにまとめて、彼女に送り届けようと決心し、レコーディングを手伝ってくれる音楽の専門家を探した。たまたま台北在住の作家の青木由香さんの紹介で、後に「爸爸辦桌 (Baba Band)」のベーシストで、バンドマスターとなる温子捷君が手伝ってくれることとなった。

子捷君は映画や広告の音楽制作を生業とし、自宅に録音スタジオを持っていた。彼は当初私の依頼に対して、外交儀礼として私に会うだけは会って、楽曲を聴いてからどう断ろうかと考えていたそうだ。というのも、彼のところには、自称ミュージシャンから対応に困るような依頼が来るのがこれまでも多々あったからだ。後々になって彼は話してくれた。紹介人の青木さんの立ち会いのもと、僕が子捷君のスタジオで「タンポポの小さな祈り」を披露すると、彼は「素晴らしい」と一言述べただけで、即座に協力を約束してくれた。これが台湾で音楽を生業とする人間から、初めて自分の楽曲が認められた瞬間だった。

ところで、ミニアルバムの制作過程で、バラードの曲にピアノが必要だということになった。この年の「台北映画祭」で「最優秀短編作品賞」を受賞した『天黒』(張榮吉監督)という映画に主演

し、子捷君とこの映画の音楽を共同制作した黄裕翔君というピアニストがいた。裕翔君は生まれつきの全盲ながら、当時台湾芸術大学音楽科の4年生であった。その彼がピアニストとしてこのミニアルバムの制作に協力してくれることとなった。その後、裕翔君はキーボーディストとして「爸爸辦桌 (Baba Band)」にも加わった。彼はどんなジャンルの曲でも、1回聴いただけで暗譜し、即興ですらすらとピアノを奏でてみせる芸当の持ち主である。

続いて、ドラマーである。前述の舒米恩 (suming) 君のバックバンドを子捷君とともに長らく務め、「週末ロッカー」を自称するサラリーマンの黄陽明君に白羽の矢が当たった。こうして2009年6月に「爸爸辦桌 (Baba Band)」は産声を上げた。

話をミニアルバムに戻そう。その後、Eさんの手術が無事に成功したこともあって、急いで制作する理由失ったミニアルバムは、私の忙しさに紛れてそのままお蔵入りしてしまった。結局、これが完成してEさんの手許に届けられたのは、二年後のクリスマスだったというオチが着く。

さて、この時期の台湾での音楽創作についても少し話を進めてみたい。私は毎朝オフィスにはMRTと呼ばれる電車に乗って私は通勤していた。自宅から最寄りの「中山国中」駅前に並ぶ屋台の一軒で、ベジタリアンのサンドイッチと無糖の豆乳を買い、オフィスで朝ご飯を摂るのが私の日課となっていた。その屋台の店主の小母さんは、私が代金を支払う時に笑顔で必ずこう一声掛けてくれたのだった。

「ありがとうございます。今日もどうぞ良い一日を！」

前日に少々辛いことがあって気分が重たい朝も、小母さんのこの一言で私は救われた。「よし、



今日も一日がんばるぞ！」という気持ちに自然と  
なった。私はその人が幸せかどうかというのは、  
こうした日常の小さな出来事を小さな幸せと感じ  
られるかどうか、その人自身が鍵を持っているの  
ではないかと思っている。私はこうした日常の些  
細な幸せを「一ミリのしあわせ」と名付けた。そ  
して、小母さんの笑顔を思い浮かべながら「一ミ  
リのしあわせ」という曲を書き上げた。

台湾の日常風景や人々の温かさに加えて、台湾  
の自然の美しさも私に創作の動機を与え続けてく  
れている。2009年5月初旬のことだった。台湾  
の若い友人で、私の「義理の姪っ子」を自称して  
くれているAさんの誘いを受けて、私は彼女の  
故郷の苗栗県三義郷を訪れた。

その日一日だけで、私は心が震撼する三つの絶  
景と出会った。一つ目が「五月の雪」という異名を  
持つ「アブラギリ」の花である。真っ白なその花が  
満開となるさまは、まるで山がうっすらと雪化粧し  
たようだ。そして、地面に散った花もまた大地に積  
もった雪のように美しい。まさに咲いてよし、散っ  
てよしである。二つ目がアカシアの一種で黄色く  
て可愛らしい「相思樹」の花。雨に揺れていたこの  
花を、私は歌の中で「思い花」と表現した。そして、  
三つ目が闇夜に一面に飛び交う「螢」である。螢  
は幼少期に見慣れていたはずだが、数十年振りに  
見たその光は、ことのほか幻想的だった。ほのかな  
光を点滅させながら、まるで明日への道を照らして

くれているようだ。夜中に台北に戻った私は、また  
もや一瞬でこの歌を書き上げた。

### 五月の雪

風に舞い散る桐の花  
そっと積もるは五月の雪  
大切な人待ちわびる  
君の心に寄り添うよ

雨に打たれる思い花  
俯きがちに震えている  
届かぬ想い秘めたまま  
君の涙の訳を知る

闇に瞬く螢火は  
遠い記憶の子守唄  
儂い夢を乗せながら  
君の明日を照らしている

風に舞い散る桐の花  
そっと積もるは五月の雪  
風に舞い散る桐の花  
そっと積もるは五月の雪・・・

(© Masaki Baba)

アブラギリは台湾で私が最も好きな花である。  
台湾の客家人が居住する北部から中部の山地に群  
生することから、今ではこの花は台湾客家を象徴





する花となり、毎年3月下旬から5月上旬のアブラギリの開花時期には、各地で「油桐花祭り」が開催され、多くの観光客を集めている。先日私は最初にアブラギリと出会った三義郷を再訪した。あの日と同じように、山一面に「五月の雪」は満開だった。そして相思樹の花も、蛍たちも健在だった。台湾に住んでいて心から良かったと思えるひと時だった。

### 311 と復興支援メディア隊：

さて、2010年9月に交流協会台北事務所での任期を全うした私は、その翌年の1月には、交流協会への出向元であり、二十年間務めた国際交流基金も辞した。そして、友人の映像関係の仕事を手伝いながら、ほぼ隔月でバンドのライブ活動を続けるがためだけに台北に通うようになっていた。一方、私は音楽プロデューサーとしての活動も徐々にスタートさせていた。手始めに、自分のバンドのキーボーディストであり、ピアニストの黄裕翔君の東京でのソロリサイタルの実現に向けて、関係機関との調整も着々と進めていた。そんな矢先、311が発生した。

仙台出身であり、被災した親戚もいる中、居ても立ってもいられなかった私は、経産省の地域活性化キーパーソン研究会の委員である榎田竜路さんが立ち上げた「復興支援メディア隊」というボランティア組織に参加し、何度も被災地に入った。

大きなメディアでは取り上げられることのない、被災者の方たちの本音のメッセージや震災から立ち上がる人々の姿を映像で拾っては、ソーシャルメディア上で公開した。また、中国や台湾のメディアのドキュメンタリー制作チームの取材の支援もした。2012年2月には、交流協会に協力をお願いし、台湾から民視テレビの取材班と台湾芸術大学映画学科の学生を被災地に招聘して、それぞれが制作したドキュメンタリーのテレビ番組と映画の撮影をコーディネートした。現地では、通訳、ガイド、運転手等一人で何役もこなした。自分自身が取材対象ともなった。民視テレビでは、東日本大震災1周年記念特別番組として『異言堂』という人気番組の枠で、2012年3月10日と11日にこの取材の様子は放送された。『未来への一通の手紙』と題されたこのドキュメンタリー番組は、その年の「アジアテレビ大賞」の「評論家賞」を受賞した。一方、台湾芸術大学チームの作品は、『未来への元気』というドキュメンタリー映画にまとめられ、2013年の「すかがわ国際短編映画祭」に出品された。

復興支援メディア隊の活動は、やがて『未来への教科書～For Our Children～』というタイトルで、被災地の子どもたちが撮影した写真ポスター展という形に展開していった。同展は羽田空港を皮切りに、国会議事堂、文科省、各地方自治体、ロンドンオリンピック会場、国際交流基金シド

ニー文化センター等、国内外様々な会場で開催された。また、BS12チャンネルのレギュラー枠で、上記タイトルの震災復興ドキュメンタリー番組の放送にも発展していった。

さて、2011年4月25日に予定されていた黄裕翔君の東京でのピアノリサイタルに話を戻そう。公演がほぼ1ヶ月後に迫っていた3月末頃のことである。継続的な余震や福島第一原発事故の影響への不安から、海外からの多くのアーティストが来日公演を取り止める中で、私は台湾の裕翔君に電話を入れた。

「君も知っているとおおり、日本では未曾有の大震災が起った。海外からのアーティストも軒並み来日を取り止めている状況だ。4月下旬の東京での君のリサイタルはどうするつもりだい？」

「えっ？馬場さん、何言っているの。もちろんやるよ。」

彼のこの一言で決まった。私たちは話し合っ彼のリサイタルをチャリティコンサートに変更し、全ての収益を義援金として被災地に寄付することとした。そして、2011年4月25日のリサイタルは、台北駐日経済文化代表処の全面的なサポートもあって、日比谷の小さな会場は満員となる盛況であった。裕翔君はこれが被災地との縁となり、その二年半後の2013年12月には、東北地方の被災地に入り、仙台、気仙沼、会津、郡山で巡回ピアノコンサートを行なった。また、相馬の山上小学校・幼稚園では、音楽の授業の枠で子どもたちとの交流も行なった。このコンサートツアーは、私が台北駐日経済文化代表処に企画を持ち込み、執行上のプロデューサーを務めた。最終的には、台湾文化部、外交部の主催、同代表処、復興支援メディア隊及び私の会社が共催という形で、公演開催地となった地元の方々の全面的なご協力のもと、実現に漕ぎ着くことができた。この場をお借りして、関係の皆

様には改めて御礼を申し上げたい。ツアー中の私は、相も変わらず舞台監督、司会、通訳を兼任するという忙しい役回りで奔走することとなった。裕翔君のピアノで温かなピアノの音色と同時にサポートイングアクトとして同行した日本人シンガーの土岐千尋さんの「大人の子守唄」と称される癒し系の歌声は、公演の先々で観客の方々の感涙を誘った。このコンサートが被災地の方々の心の復興の一助になればという裕翔君や私の思いは、何とか届けられたのではないかと思っている。このコンサートの模様は、2014年3月に、前述のBS12チャンネルの『未来への教科書～For Our Children～』という番組で既に放映された。また、裕翔君と私は、2012年3月11日に台北郊外の淡水で行なわれた『謝台湾！』震災一周年記念イベントにも、ゲスト出演したことも併せて記しておく。

### 台湾映画『光にふれる』と出会い、再び約束の地へ：

さて、ここで2012年の台北映画祭で初公開され、この年の台湾でのヒット作の一つとなった映画『光にふれる（原題：逆光飛翔）』（ウォン・カーウァイ製作総指揮、張榮吉監督）に触れておこう。この作品は、上述の黄裕翔君の生い立ちをもとに改編され、裕翔君自身が主演している。「台北映画祭」で「観客賞」と「最優秀主演女優賞」（張榕容）を獲得し、その後も釜山、東京、ベルリン等の国際映画祭にも招待された。この作品はこの年の「金馬賞国際映画祭」でも「最優秀新人監督賞」（張榮吉）、「台湾年間傑出映画人賞」（黄裕翔）、「ミラノ国際映画祭」では「最優秀主演男優賞」（黄裕翔）を受賞し、今年2014年2月には日本でも公開されている。

そして、この映画は私にとっても記念すべき作品となった。蔡健雅（タニア・チュア）が歌ったこの作品のエンディング主題歌「海のそばで（原題：很靠近海）」の作曲者として、また友情出演の

俳優として、私もエンドロールに名前を連ねることとなったのである。金馬賞国際映画祭の授賞式では、監督や主演俳優に混じって、私もレッドカーペットの上を歩かせていただいた。この主題歌がきっかけとなり、その年の暮れには、私は某大手レコード会社とも、専属作曲家としての契約を結ぶこととなった。

こうして台湾で音楽家としての一步を踏み出すこととなった私は、活動拠点を台北に移し、2013年1月には自ら会社を立ち上げ、自分自身の活動をマネジメントするとともに、民間の立場から音楽を中心に日台文化交流の橋渡し役を目指していくこととなった。この決定に当たって、私は特に感謝している人物がいる。二人の息子たちである。ともに既に成人した彼らは、私がこの計画を打ち明けた時に、揃ってこう言って背中を押してくれたのだった。

「お父さん、才能あるんだから、とことんやってみるべきだよ。」

今では、彼らは私の音楽の最大の理解者であり、支持者である。一人の父親として、音楽家として、これ以上の幸せはない。

### 紆余曲折と新たな挑戦：

昨年3月に満五十歳の誕生日を台湾で迎えた。その昔、日本では「人生五十年」と言われた。自分は既にその年齢に達したが、これまでの五十年間を「前世」の出来事と思うようにした。そして、今日から自分の「今世」が新たに始まる。するとこんなふうに思えてきた。「前世」の知識と経験と人脈を持ったまま「今世」を行きて行ける。これは何と大きなアドバンテージではないか。もちろん、新たな「今世」は零歳からのスタートではない。二十年ほど時計を巻き戻し、だいたい三十歳くらいから新たに人生を始めさせてもらえる

と思えば良い。こんなふうに考えると、それだけで心が踊った。

一方、実際の「今世」はそこまで甘くないのも現実である。とりわけ外国人の私にとっては、台湾の音楽業界は未知の世界であり、全くの手探り状態からのスタートだった。自分にとって有り難い人もそうでない人もいる。足下を見られたことも、騙されたことも、信頼していた人から裏切られたこともある。創作のパートナーだったEさんも、結局病気が再発し、昨年5月に帰らぬ人となってしまった。しかしながら、新たな試練は、実は貴重な学習と成長の機会でもあり、次の新たな挑戦を生み出してくれるということにも気付いた。紆余曲折も決して無駄ではない。何より本来やりたかった世界に身を置けていることに自ずと幸せを感じずにはいられない。

最近では音楽関係以外にも、俳優や声優、モデル、インタビュアー、ライター等の仕事もいただいている。今年の旧正月映画『大稻埕』（葉天倫監督）では、台北州警察署長の役を演じた。新たな分野の挑戦は、本業の音楽にも様々な刺激やアイデアを還元してくれている。自分の裡なるものを表現するという点においては、全てのアートは繋がっている。仕事を受けるかどうかの基準は一つ。その話を聞いて心がワクワクするかどうかである。

この数年来、ずっと温めてきたことがある。それは、台湾の温泉や景勝地を巡ってご当地ソングを創る作業であり、既に何曲か書き溜めている。昨年、台湾の「流し」の歌手、阿家君と「八得力（バッテリー）」という新たなバンドも結成した。一つの曲に日本語、台湾語、中国語、時に英語が飛び交うユニークなバンドである。ご当地ソングはこのバンドの持ち歌として、今後少しずつ披露していくこととなる。

また、台湾には日本の本歌に台湾語の歌詞が付けられ、台湾人の心の歌として親しまれている曲が数多くある。日本と台湾の歴史や文化の交差点

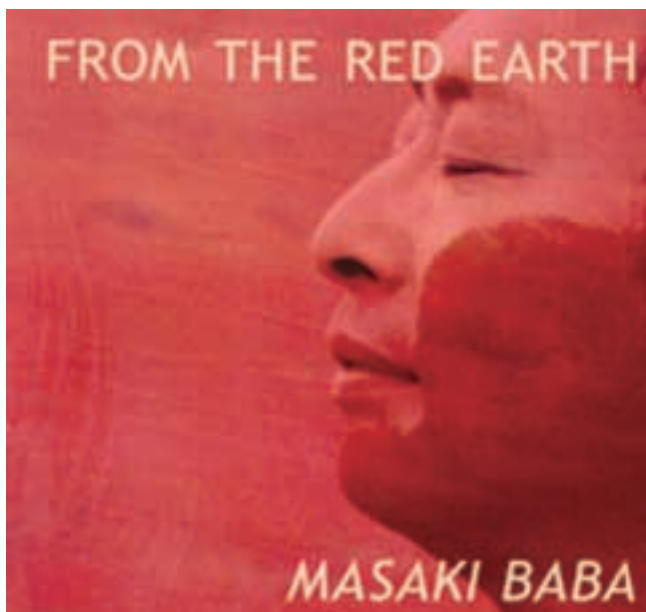


に位置するこれらの曲も拾い上げ、歌い継いでいくことも自分の役割の一つと感じている。

時々私の決断に対して、賛辞か外交辞令か半ば呆れてなのか「勇気がありますね」と言われることがある。ただ、私は自分の心の声にしたがっただけである。偶然の積み重ねがここまで私を導いてくれたが、振り返ってみると日本と台湾の友人たちによって紡がれたこの縁は、偶然を装った必然とも思えてくる。若い頃は、自分がやりたいこと、自分の能力でできること、自分の使命としてやらなければならないことが、なかなか一致しなかった。やりたくてもできなかつたり、やらなければならない

いのにやりたくなかつたり……。しかし、年齢を重ねた今だからこそ、またこうした決断ができたからこそ、結果としてやりたいこと、できること、やらなければならないことが次第に一点にフォーカスされてきたのだろうと感じている。

自分の人生劇場がこれからどのような方向に向かって行くのかはわからない。今はこれまでの縁に感謝しながら、五十歳を過ぎて始まった「今世」の一日一日を集中して生き切るのみである。そして、もし六十歳を過ぎた自分が、あの時見た夢の光景と同じようにどこかで歌っていられるとしたら、これ以上望むことは私には何もない。



©MayuKanamori



©Baba Band